
鬼が噛った紅い空

珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼が嗤つた紅い空

【Zコード】

Z9721W

【作者名】

珀

【あらすじ】

ある嵐の日。平和な万事屋にまたもや厄介事を運び込んできた
のは銀時の旧友、桂小太郎。京では高杉が立ち上がり、幕府を倒
すべく集まる攘夷志士。狙われる真選組に焦る銀時。事件の鍵
を握るのは…？？天導衆を明かす闘いの幕は上がり、歯車は廻り
出した――

週2日更新予定 各過去話修正しました。

序章 風の前の…

「ちょっと神楽ちゃん！ あつ 銀さんまで、まったく・・・」

江戸はかぶき町、人情の街の一角に佇む万事屋では、従業員がオーナーに呆れかえるといつお馴染みの光景が繰り広げられていた。

しかし、今日に限ってはそれも仕方のこと。あらゆる商店は軒並み休業。

寺子屋も飛脚も待機状態といった所か：

とにかく空からばバケツでもひっくり返したかのような大雨が降り続け、

何十年もこの街に息づいている大木が強風に煽られ、枝は葉も引きちぎられて窓に叩きつけられている。

先ほどから、この薄すざる万事屋の窓は割れてしまつんじやないかと心配するほどの音を立てて揺れている。

江戸中の人間がだらだらと退屈そつここの今世紀最大の威力を誇るといわれる台風が過ぎ去るのを待つてゐるだろ?..

しかし、万事屋の家政婦兼従業員の志村新八に限つては、こんな日でもテキパキと家事をこなしている。

今は、昨日取り込んだあと台風に備えていなかつた事に気づいて慌てて外に飛び出してしまつた為に放置していつた洗濯物を畳みながら他の従業員のだらけつぶりに注意を促すといつ母親奥義を駆使していゝ訳だが…。

「おい新ハイ、ジャンプ買つてこいよジャンプつーーー。つたくこんな日に毎晩ぐらいいいだろーが!」

あーなんかこねえかなつ なんか起きるんじやないかなつ!

「まじでかつ!/? 今日は暇過ぎるやつ どんな事件もどーんといネツ!」

途端、台風が過ぎ去るのを煩くもただ待つだけだと思われた万事屋に

屋根を打ち付ける雨音のせいかやや控えめないつも通りの間延びしたメロディが――

ピーンポーン ピーンポーン…

新たな事件の始まる合図が、鳴り響いた

開幕　厄介な訪問者（前書き）

読んでくださつてありがとうございます。

初小説からいきなり連載つて……まだ話はすすみませんが、宜しくお願いします。

開幕 厄介な訪問者

ザア——

「新ハイ、そろそろ出てやれよ、こんな風の中わざわざ万事屋なんかにきたんだ、よっぽど困つてゐるんじゃねーの?」

しつこいチャイムの嵐が降る万事屋の中、ソファードラしなく
寛ぐ銀時。

に賛同するよつて銀時とは反対側のソファードラで定春とじやれていた
神楽までもが、

「やつアル。私たちは台風を満喫してゐから忙しいネーぱつつかず一つといつも通り。ヒマなんでショーヘナセと行つてくるヨロシ

家政夫、もとい新ハは洗濯物を畳む手を止め、ぶつぶつ文句をい

いながら玄関に向かう。哀れ、慣れたものだ。

ずっと鳴り響いていたチャイムの主を迎えるように引き戸を開けつつ

「お待たせしてすみません。こんな嵐の中、どうかなさいましたか？」

バタンッ！

開けてすぐに扉を閉じたのだとわかる音が万事屋を揺らし、先ほど玄関に新八を向かわせた2人も訝しげに顔を見合させ、のたのたと玄関へ向かう。

玄関の引き戸では新八と訪問者が決死の攻防戦を繰り広げているようで、ドタドタと小刻みに鳴つていいる。

仕方がないので新八を戦線離脱させ、いきなり抵抗がなくなつたことでのんのめつた訪問者に銀時の蹴りが入った…

ドゴッ ズルッ と妙な音を立てて玄関外の手すりに頭を打ち付けた後、滑つて静かに地面に着地したのは黒髪で長髪の

「ヅラ…」

「銀さん、聞いても無駄ですよ。桂さんもう伸びてます。厄介事に巻き込まれる前に帰つてもうおつかと思つたんですけどね…」

「うあえー」の嵐の口の厄介な訪問者を腰間に引き上げ、お茶を勧めると息を吹替えし、やたらと真面目そうな口調で語りだした。

「ああ 新八くん、お茶ありがとう。といつか銀時貴様、顔もみずに蹴つてくるとさじうごうことだつまたく、せっかくこの嵐の中、わざわざ情報を持つてきてやつ

たところの……」

片腕を組み、頬杖をつくようなポーズでわざとらしくため息を吐く桂に、若干苛立つたような銀時の言葉が続く。

「マジで面倒事かよ……勘弁してくれ。つつとも、おめえがどうしようもない馬鹿だつてことは知ってるが、こんな嵐ん中だ。よっぽどの事だつ？幕府か、高杉関連か、宇宙のゴタゴタかあ！？真選組に追われている、なんていわせねーぜ？」

「まてまて銀時ッ 断じてあの犬共などではないつ といふか、奴らもこの嵐の中じやおとなしく息を潜めている… そうだ。動き出したのは、天皇だ。」

「「「はあつー？」」「

うつてかわつて静まり返った万事屋に、桂が茶を啜る音だけが響い

て
い
た
:

開幕　厄介な訪問者（後書き）

…さあ、幕は上がった。

初動 天皇方の思惑（前書き）

3話目でこのスピードはないと想いますが…少しづつ、回り始めます。

初動 天皇方の思惑

「てつ 天皇が動き出したって… 天皇なんていたんですか？」

最初に口を開き、禁句を放ったのは新ハだった。ちなみにこの世界でもちやんと天皇は居るって事で話を進めます。

「おいおい新ハイ、いくらなんでもそりゃないだろ。今ではお飾りとしか言いようがないが、まあ居るぜ」

「そうだ。今では新ハ君がしらない程に影が薄くなっている。幕府からの援助でなんとか成立していす訳だからな。だが、本来我らが掲げる攘夷とは、尊皇攘夷といって幕府から天皇に政権を奉還させ、天皇中心の国家を作るものなんだ。つまり、幕府は敵で天皇は見方になつてもらわねばならない。

天皇ほど影響力のあるお方なら、国民も反乱することなく新しい政についてしてくれるだろうからな。」

とりあえず真剣な顔をして聞いていた3人だが、話があまりにも長いので桂が律儀に持ってきた茶菓子をくわえながら頷く。

「ふーん、じゃあその天皇とやらから攘夷軍に号令でもかかつたのか？私を保護し、いざ幕府を討たん！ みたいな感じなんだろ」

「えつ ジャあ桂さん達もそれに参加するんですか？それで、万

事屋になんの用ですか？」

ジト目で桂を眺める万事屋3人にもめげず、桂は話しう出す。

「それで、その天皇の号令なんだが、彼もなんだつて幕府勢を皆殺しにしたいのではない。政権の奉還…幕府の消滅さえすれば良いんだ。そこで、我々攘夷軍の中ではやはり將軍の説得から変えていけたら…そう思つているんだ。だから、一般市民でありながらなにかと將軍と関わりのある貴様にな…」

再度静まり返る万事屋。今回切り出したのは銀時だった。

「江戸の人々に被害が及ばねえならなんだつていい。んだが、お前エはそれでいいのか？天皇が主権を握つたところで、国を変えられる保証なんてどこにある？大体そんなもん信じていいのかよ。それに、幕府には宇宙がついてる…どうするつもりだ。」

「なあ銀時、高杉が宇宙海賊春雨と本格的に手を組んだのをしつているか?」「

歯車は、狂い出し

初動 天皇方の思惑（後書き）

神「ちょっと、なんで新ハだけセリフがあるネ！？ワタシ“三人”ってトコしかでてないヨつ」

暗雲 静かな嵐の予感

「晋助様つー?」

「は鬼兵隊の中。現在地点は京の上空だ。

高杉に呼ばれて集まつた幹部が聞かされた唐突な話に来島が声を荒らげたのだ。

「晋助殿、しかし今後他の稳健派の攘夷軍と共に天皇について幕府を倒す等…

我々が手を組んでいる春雨につながる幕府の裏、天導衆などどうするつもりでござるか?

それに天皇など信用できぬ。我々を納得させる説明を頼むでござる」

話の割りには不信感を抱いていないように見える部下達に満足しつつ、鬼兵隊総督は囁つた

「ああ、追追　な。今から江戸に飛ぶぜ……ヅラ達や……銀時に話しける。

「葬つてやるよ。」

俺たちの手で、幕府・天導衆

-----所変わつて、あの嵐の幕開けから数日後の万事屋

何事もなかつたように依頼をこなしていた万事屋だつたが、今日は猫の引渡しや浮氣調査の結果を伝えるだとか、短時間で終わるもののが多かつたために万事屋で軽く寛いでいた。

あの日以降は晴天が続いていて、気持ちのいい秋晴れが続いているのだが銀時はどこか上の空で、なんともいえない嫌な雰囲気を醸している。

もちろん新ハや神楽も気づいていたが、深刻とも言い難い様子だつたのでそのままにしていたのだ。

午後3時を回ったあたりで銀時はいきなり立ち上がり、2人に留守を任せ出歩いてくると言い出した。

「いいですけど。いきなりどうしたんですか？銀さん、最近ちょっとうっかりしているから、その 心配で…」

「そうアル。何言つても返事同じヨ。それに、一昨日はお茶碗割つていたし、夜も魔されているヨー？そんなで一人で出掛けた大丈夫アルカツ？」

「銀ちゃん、桂さんや高杉さんの事が気になるなり、事件に関わるような事があつても構いません。もつと僕たちを巻き込んでくださいね…？」

「ああ。ちょっと遅くなるかもしらねえが、ちゃんと此処に帰つてくろ。留守番頼むな。」

「この不良息子が心配かけてツー銀ちゃん、危ないこと一人でしゃダメアルよつ！」

酔昆布を齧りながら手すりに腰掛け、彼の背中を見送る姿はいつも通り。

平穏を保つ

——江戸は未だ

邂逅 必然の出来事（前書き）

銀時 sideで… 説明口調は説明口調で面倒なんですが、銀さん
つて基本何考えてるかわかりません… (T_T)

邂逅 必然の出会い

銀時は万事屋を出て、かぶき町周辺を歩いていた。

つて、神楽達にはああいつたけど、別に何かを掴んでるって訳じやないしなあ…

とりあえず遅くなつても心配かけねえよ! はしたが…なんか嫌な予感がすんだよなあ

ふわふわな癖つ毛の跳ねる白い頭をガシガシと搔きつつ歩を進めていく

電気屋の隣を通り、「お天気キャスターが「雲一つない青空。爽やかな秋晴れが続くで…」なんていっているので思わず空を見上げれば、ば

そこに広がるのは、雲ではなく船の飛び交う青空…

「絶好の航海日和ですねえ。つてか？」

空を行き交う船を見ていたらふいに高杉の事を思い出し、立ち止まつて宙を睨んでいると、後ろに人の立ち止まつた気配。

なんとなしに氣だるげな表情を浮かべて振り返れば、できれば会いたくなかった江戸の黒い影、真選組の隊服。

「奇遇ですねイ　田那ア。またこんな江戸の外れに何の用でイ？」

不思議そうな瞳で尋ねてくるのは、一番隊隊長　沖田総悟クン。どうやら考え方をしていたために遠出をしそぎていたようだ。あまり安全とはいえない此処では迂闊な行為だったかと心の中で舌打ちしつつ、

「いや、特に用はねえよ、ぶらついてただけだ。んでお前は？見回りにしてやあ珍しいとこ廻ってるんじやねえの？」

適当な返事で聞き返すと、沖田は暫く黙っていたがいきなり「ヤリ」と笑つて

「旦那、これは機密事項なんですが、どうやら高杉の野郎が江戸に向かっているらしいんでさア。暫くの間地球から離れて…宇宙にも手を出してるみたいなんで、俺らは絶賛警戒中。鬼副長さんのオーラにやあ隊のものが手を焼いていて…迷惑なモノでさア。 旦那も気を付けてください、そんじやあこれで失礼しやす。」

とんでもない事をカラリと呟つと、用は済んだとばかりに踵を返しどこかえ歩いていこうとする。

「ふーん。そんなに大変なんだー。でも、その口に銜えているのはなにかな?ビームでも団子の串つじゃね?って無視かよ!」

まつたく、ビームの副長さんも大変だねえ…

沖田と別れてから暫くして、日は落ち、夕日に照らされる川に架けられた橋に行き着いてしまった。あとはどこかで夕飯を済まして帰るかなあなんて思いながら佇んでいると、懐かしい思い出がよみがえるよつて暫くそのまままでいた。

まだ幼かつた頃。村塾での甘い砂糖菓子のよつな日々…消える時も砂糖菓子のよつに優しく、なんて脆い幸せだったのだろうと眞がおかしくなりそうだった。でも、あの時まさにジリヤ高杉もいて…

なぜだか今日は高杉の事ばかり思ひ出せる。以前袂を別ち、次にあつたときは斬ると誓つてみせた。

…そんなことが本当に出来るのか？高杉は本当に変わってしまったのだろうか？

「普段使わない頭でいろいろ考えるもんじゃねーなあ」

すっかり暗くなってしまった帰路を眺めながら駆け、歩を進めようとした瞬間…

背後に…しかも殺氣を纏つた影を感じ、反射的に木刀を当てれば、
刀の感触。

今 最も出会いいたくなかった宿敵

「高杉イツー？」

背後から刀をけしかけた殺氣の主は囁い、応えた。

「よお 白髪のお侍さんとやう…。ううと 手合わせ願つてもいい
いかイ？」

邂逅 必然の出会い（後書き）

この話は流れから決めていったので、タイトル…実は決まっていないのです。落ち着くまで「ロロロロ変わるかもしません…」
ー）へ

休戦 繋がれるケモノの手（前書き）

高杉さんは扱いづら過ぎなのでもういいです。キャラ崩壊つて程で
もないといいんですけど…（笑）

休戦 繋がれるケモノの手

夏が終わり、秋になる。そんな季節の変わり目のとある穏やかな宵。

日が完全に暮れたばかりで、子供たちの騒ぐ声や食器を片付ける水の音なんかが響く、極普通の日。

だが、江戸の外れにある橋の上では、そこだけ切り取られ、別の世界が広がっているように殺伐としていた。
或る一匹の獣が争っているのだ。

獣…一匹は相反じていた。片方は白く、片方は黒く。

片方は今にも折れそうな木の刀を、片方は強靭な鉄の刀を振りかざす。

また片方は護ることで世界をあらわし、片方は世界を壊して世界をつくりっていた。

そう、一匹の獣は反対の存在。だからこそ、片方は防戦一方で、もう片方は攻め続けるのだ。

黒い方が橋の端まで走つて大きく跳躍する。

相も変わらず激しく打ち合いながら一人は交錯した。

「銀時イ、今日はテメエと争ひ為に江戸に来たんじゃねエ。」

「ああ！？ ジヤあなんでいきなりけしかけて来んだよ？
だいたいなんでいつも俺が木刀でおめえは真剣な訳？俺アなあ、今
田は家に帰つてゆつくり休むつもりなんだよ。ガキ共も待つてるし
おめえに付き合つ氣はねエッ」

「てめエこ何言つてやがんだア…わきから言つてるだろうが、
その撃ち込みを止めやつつてんだよー」

高杉は降つてきた木刀を思いつきり返す。一匹は離れた。

激しい攻防の割りには静かな息をする両者・・

先ほどまでずっと片方を攻め続けていたのは白の鬼。いつもは愉快そうに相手を屠る黒の獣は、今日はただ白い方のしつこい木刀をいなしているだけなのだ。

なにやら争っているのだが、人間離れした闘いをしているように見えて、黒い方は白い方を止めよつとしているだけである。

…再び剣が交差しようとした時、いきなり銀時が足を蹴り出し、そ

のままの勢いで高杉の顔に強打した…

「う…なにしゃがんだ、銀時イ…」

散々の説得も聞かない上に顔面をキックしていく幼馴染…今は敵ともいえる存在だが…なんて普通はいない。怒りも露わに見上げると、

銀時が一いつ瞬をかいつのべているのだ。口には軽く笑みさえ浮かべている。

「？」

「高杉イ、この前の宣言はこれでナシだ。刀アしまえ。んでもってその江戸に来た訳とやらを聞かせろや。」

高杉は地面に倒れたままくつくつと黙り、さじのべられた手を掴んで立ち上がる。

「相変わらずのお人好しだなア 銀時よお。」つからは休戦だ。取り敢えずは、お前Hの巣。あのふざけた商売やつてる……」

「万事屋にきたいつてか? 大物攘夷浪士の 高杉晋助さん?

「まあ、食費やらなんやら金出してくれるなら、ようじいも鉄の街、かぶき町ぐ。」

とある晩の事、獣は久しぶりに手を組んだ。

休戦 繋がれるケモノの手（後書き）

沢山の閲覧やお気に入り登録など、ありがとうございます。しかし
い文章ですが、どうぞ暫くお付き合って下さい。

平穂 黒い波紋（前書き）

本当にゆっくり進んでいきます。気長にお願いします。

平穩 黒い波紋

とある江戸の外れで「いや今は一人の共犯者が手をくんでから数時間後：

夜は更け、満月が夜空の真ん中に君臨しようとする頃のことだ。

かぶき町の中心とも言える人物、お登勢のスナックの2階で日々、ギリギリの生活を送っている万事屋では…

まだ成人を迎えていない若い男女がなにやら言い争っていた。

しかし、ひとくらは江戸の外れとは違い、力の差が歴然である…

「ちょっと、神楽ちゃん。もう一、二時だよつて寝不足は美容の大敵つていつも言つてるでしょ？銀さんは多分どこかで飲んでるから遅くなつてるんだよ。」

「五月蠅いアル眼鏡。今日の銀ちゃんは絶対酒なんか飲まないね。

これ女の確信！」

銀ちゃんは帰つてくるネ、必ず。でも、そうじやない。もっと別の匂いがするマ…」

神楽はソファーに座り、友達から貸してもらつたのだといつ雑誌をバラバラと捲つていた。

「神楽ちゃん…」

新八は神楽の向かい側に座ると、顔を上げようとしない年下の、大事な家族である女の子を見つめる。

暫く俯いていたが、やがてかすかな微笑を浮かべると顔を上げた。つられて神楽が顔を上げると、田を合わせて言ひ……

「神楽ちゃんがそんなに言つながら信じるよ。何かあつたら大変だし、僕も万事屋に泊まることにするよ」

「駄眼鏡が一人増えたところで足でまといが増えるだけアル 調子のつてんじやねーヨ」

新八に夜兎族の…力を加減した蹴りがめり込み、そのままの勢いで新八は万事屋内を転がる。

と、その時…

二人が来てからもう数え切れない程、何度も壊れている万事屋の玄関外から待ちかねていた声が届く。

「おーい、銀さんが帰ってきたぞー アレっ？まだ新ハの奴帰つてねエのか…？」

靴を見ながら銀時が首を傾げていると、いつもとは違い一人が玄関まできて迎えてくれた。

「お帰りヨ 銀ちゃん。まったくこんな遅くまで出歩いてつ

神楽は軽く口をすぼめ、お母さんのような口調でむかえ、

「本当ですよ。心配したんですからね、銀さん。」

新八は言葉少なに笑つた。このまま3人で万事屋に入つていくかと思われたが、

「誰アルカつ？」

神楽がいきなり叫んだかと思うと、たつた今銀時が帰つてきた玄関前の方に蹴りをいれつついつ取り出したのか夜兎特有の傘から弾丸を放つ…

「神楽ちやーんつ それはダメつ そいつと今殺り合ひのは絶対ナシツ！」

先ほどまで機嫌の良かつた銀時が 慌てた様子で神楽を掴み、引き戻す。

「おいおい銀時イ、ずいぶんな出迎えだなア……？」

怒りを隠すことなく煙と瓦礫の奥から現れた人物に銀時以外の人物
が田を見開く

幕府の転覆を狙い、中から外から搖さぶっては破壊を繰り返す田下
の最重要テロリストの指名手配犯…

攘夷戦争を闘い、今では攘夷志士として名を馳せる 鬼兵隊総督。

「高杉つー！？」

平穂 黒い波紋（後書き）

お気に入り登録せ評価、本当にありがとうございます。

文章も直していきたいので、たくさん描いて下さる事大歓迎です。

静寂 子供は眠る（前書き）

お読み頂き有難うござります。更新じゃなくて展開が亀… 展開優先で早く回した方がいいかよくわからないので、貴重なご意見、お待ちしています。

静寂 子供は眠る

深夜…泣く子も眠る 丑三つ時…

そんな時間にも関わらずなかなか眠れず、布団の中で一人唸る人物
がいた

江戸のかぶき町に佇むなんでも屋 万事屋銀ちゃんの和室である…

『あああ…眠れない。 眠れないよオオオ…』

トレーデマークにして自身の大部分である愛用の眼鏡を外し、眠れ

ない夜を明かすのは、万事屋の従業員…志村新八

『つてかそりゃ そりだよね！…テロリストと一つ屋根の下で寝るなんてできるわけないだろーがアアア！…』

一人ツツコミが胸中で空しく響く　しかし彼を助けるものは今い
ないのだ。

「つそりと布団から顔を出し、辺りを伺う　隣に寝てこるのは同じ
く従業員の神楽ちゃん

和室には自分と一人しかいないが、彼女は当然のよつに酷い寝相で
熟睡している・

さうして和室と居間を区切る普段はなんでもない…しかし今の新八
にとつては掛け替えのない 薄い襖を見つめる・この奥には、
銀さんとあの大物テロリストで神楽ちゃんが直接対峙した事のある

高杉晋助がいる。しかも気配からして寝ている。

『 つてか、 イヤなんどそんな人が万事屋でフジーに寝てんのオ
オオ？？』

謎としかいいようがない。あの嫌な台風の日からずっと 銀さんの
調子がおかしく、一人でそれとなくは心配してこた。

今朝はその事を云々、無茶をしなこと念を押したのだ。なの
に…

『なんで高杉さん？桂さんならまあ普通つて感じだけど こくら

幼馴染み（？）だから「コノハ・・でもやつぱりあの桂さんが言つてた事、なにか起じゆつとしているつてことだ。もちろん江戸でも騒ぎが起きるだらうし……。全国の攘夷浪士が……一斉に……？もし かしたら、銀さんは……』

こうして新八はいつもより大分遅く、深い眠りに落ちた……

万事屋の夜はまだ長

い…

静寂 子供は眠る（後書き）

今日中にもうこいつに出します。次話はちょっとだけ面倒なお話になつてしまいますが、宜しくお願ひします。

暗黙 難破船の行方（前書き）

「いやいや会話文が長いです。すみません（――）文章力不足です。

「ようやく眠つたみてよだなア……つたく、手間ア掛けさせやがつて、」

「イヤイヤ、新八が眠れなかつたのつて明らかにオメーのせいだろーが……！」

新八が眠りに就くや否や真っ暗な万事屋の居間で騒ぎだしたのは銀時と高杉。

子供一人が眠りに就くまで律儀に息を潜めていたのだ。

高杉は飾つてある“糖分”と書かれた額の下にある窓の縁に腰掛け、煙管を弄ぶ。

銀時も煙たりながらソファーアーに寝転ぶ。

「フン。やつと本題に入れるなア…」」」まで別の道を通りてきたのは犬避けだるーが、もし俺が、テメー巻き込む為にわざと餌付けてきたらどーするつもりだつたんだ?」

「いやね おたく、なんか微妙に脅してくれてるみたいですけど、オメーが江戸まで来ることはとっくに真選組も知ってるからね。その派手な着物のせいで目立つてんのわかってるよね?」

だるさうに返事を返し、帰りにコンビニで買ってきていた「牛乳を吸う銀時」を横目で見つつ、高杉が離し出す。

「近頃、この国がやたらと騒がしいのは知ってるよな？」

「まあな。こちにはヅラがいるもんで、情報には事欠かねエよ。ただ、詳しきは知らねえ。つーか、オマーは、その」

「あア、鬼兵隊が目指すのは世界の破壊…幕府にも攘夷派が潜伏している。春雨も幕府を生かすことに執着なんかはしてねエ。んだが、政権：日本の中心が天皇とやらに変わったところでなにもかわんねエだろ。天人共は地球の窓口として、この国を牛耳り屠る…幕府の裏にも妙な奴等がいるしなア。俺もいろいろ手エだしてみたが、あの犬…裏の幕府にとっちゃあ邪魔でしかねエよ。オマーはご執心みてえだが…幕府はあいつらを盾程度にしかみてねエさ。なあ、どうするつもりだ？」

「なんことわかってるし、話が長すぎだらつーや、わかってるし、

銀さんもちゃんと考えてたからね！幕府を倒すつていうのは存外簡単なんじゃねえの？だって將軍が天皇に政権でもかえしゃ、幕府なんてないに等しいだろ？旧き日本の勢力と新しい宇宙からの征服…

俺はあの時みたいに仲間を喪うの事なら命に替えても止めてみせる。死ぬつもりはないけどな。 幕府は説得で崩す。そんであの空飛ぶ裏幕府は海の上で墮とす…天人がきたときもずっと地下に潜つてやりすごしていたような天皇にこの国をあずけるなんてマネはしねえよ。飾りとして、利用できるだけしてやるさ。…なんて、机上の空論…わかんねえな。なんで今更動き出したんだ？」

高杉は銀時をみるとなく見ていたが、ふいに江戸の中心の方を見つめながら応える

「最近、ヅラが昔狙つてたター・ミナルがなあ、そろそろ小さすぎるんだそうだ。だから江戸中ぶつ飛ばして大ター・ミナルにしようつて事らしい。これは天人側にしかない情報だぜエ。 それで慌ただしい時に天皇だア… 一遍に片アつくれるまたとない機会だ。」

獲物を見定めた獣に目をして嗤つ高杉を照らすのは、不吉な紅い満月…

暗黙 難破船の行方（後書き）

読みにくさ点があるかと思いますが、読んでいただき感謝です。

幕間 女王の実力（前書き）

お気に入り登録等、たくさんありがとうございます。3連休なのでちゃんと話を進めたいです（笑）

幕間 女王の実力

「おはようハジケコマズ一畠セラ、早く起きて下セコフ」

午前8時。万事屋に響いた声の主は、従業員兼雜務の新ハだ。

昨夜に踏ん切りがついたのか いつも通りに神楽ちゃんを起こし、

寝ていた和室から銀時と高杉がいるであろう事務所兼居間に入った
ところで、妙な声を発した。

「は？」

ソファーにいたのは昨夜突然の訪問者
高杉晋助。

そして、その横のテーブルに載せられた紙切れ…

「今日は結野アナの…じゃなくて、とあるお方から大切な物を受け取りにいって出かけます。お昼には帰ってくるから、それまで高杉と仲良くやつてろよー」 銀さんより

「ハアアアアつ！？」

なにやら叫びながら新ハが和室に駆け込み、盛大な音を立てて襖を閉めてから蹲る。

（無理！…腹決めたなんて嘘！まだ死にたくないよオオオ）

取り敢えず逃げようと辺りを見回すと、なぜか寝ている筈の神楽がない。

「かつ神楽ちゃん…？」

恐る恐る襖を開けると、そこでは 有り得ない光景が繰り広げられて…

「なにしどんじゃアアアツー？？？」

先ほどまでびくついていたのが嘘かのような大音量のツッコミが炸裂した途端、

新八の口は神楽の手で塞がれる

「なにするネ 新ハイ！！ ワタシここにつけられても酷い目にあわされた
田 だから今はコレ、仕返しアル！！」

「へえ、そりなんだ、仕方ないね。 じゃねエエだろーが……」

神楽がムフフ と笑いながら熱心に手を動かしているのだが、なにをしているかといふと、寝ている高杉の顔に落書きをしているのである。

そんなことがバレたら、といふかバレるに決まっている。

「絶対殺されるウゥー！逃げよウツ 逃げよウツ 神楽ちゃんー！」

「オウツ」

窓枠に足を掛けた状態でどちらが先に出てか争っていると、その瞬間開いた襖から……最も聞きたく……ない……声が……

「なしてやがる、ガキ共。」

「わああッ」その声に新八が固まり、神楽と共に和室に落下する。

氣絶した新八の横で、神楽は慌てる。

が、高杉の顔には適当に描いた落書きが載っているのだ、笑いを押し殺しながら、弁明をする

「ちょっと違うヨー！ プツ ソレ、銀ちゃんがやったのヨきっと！
クスツ だから今すぐ顔洗つて朝ごはん作るヨロシ！ ブハハハ
ハッ！」

高杉は訝しむようなふざけた顔で笑いを殺しきれていない神楽の話を聞いていたが、

神楽が堪えきれず笑いだすと、とりあえず洗面所へ駆け込んだ。

数分後：

高杉が居間に戻つてくるなり発した人物の名は、

「銀時の野郎、覚えてやがれ……」

和室の襖から「」と覗いていた新ハと神楽はため息をつく。

「良かつた。高杉さん勘違いしてくれたみたいだね。アレフ！
？神楽ちゃん？」

「オイ、片田H。さうさて、飯つくるアロシ。かぶき町に来たから
にはこの女H神楽様に従つがいいネ。」

銀時の置き手紙を見て怒りが強まつたのが、手が若干震えている高
杉に居間にいつの間にか移動していた神楽が命令していた。

新ハが一人焦る中、置き手紙を懷にしまつた高杉が呆れたよつな顔

をして神楽を見る

「女王様ねエ… つたく 銀時の野郎、何から何まで…」

ぶつぶつと囁きながら台所へ向かっていった。

が今始まるつ！

高杉と新八神楽が織り成すドタバタコメディー

幕間 女王の実力（後書き）

…始まりません

次話はちょっとそんな感じですが… 1Jの前にゆるいとした短編を出したんですが、アレと此の話は繋がっています。

留市 獣と兎と眼鏡と…（前書き）

ジャンプ本誌では万事屋金ちゃんが連載されていますが、いひなじゅ
万事屋金ちゃんです（笑）

…明日も出しあわせたら暫く潜るかもです…

留守 獣と兎と眼鏡と…

はふはふ ズー

時刻は午前9時

先程までドタバタと騒がしかつた万事屋も今は出掛けに銀時が用意したのであろう味噌汁と神楽特製の卵掛けご飯を食べる音だけが響いていた

本日5杯目の卵掛けご飯を搔き込み一息ついて、味噌汁をお椀に注ぎながら神楽が口を開く

「んで? 片目はワタシが支配する万事屋になんの用アルカ? かぶき町征服アルカ?」

「片目じやねエ…高杉だ。用があんなア此処じやなくて銀時の野郎さ。今回は江戸を壊すんじやねエ…護りに来たんだよ。」

予想外の返答に神楽が啞然としていると横から新ハが口を出す

「どういう風の吹きまわですか高杉さん？結局みんなして何をするつもりなんですか？」

警戒心を解いた新ハは本当に困ったような顔をしながら続ける

「桂さんや高杉さん それに銀さんもみんなで様子がおかしくて、何か大変な事が起こる…起こっているんでしようけど

今日も江戸は平和で、かぶきは快晴なんですよ。さっぱりですから、やつぱりもつと詳しく教えて欲しいんです。

僕達だって銀さん達の味方です。江戸を護りたいんです…」

「そうアル 昨日も私達が寝た後にコソコソと…」

途中で丁度食事がかたづき、話はそこで止まった。

3人揃つて手を合わせ、新ハガ食器を片付けると高杉は長椅子で胡座の上に置いた荷物を探りながら話し出す。

「悪いが この件は俺だけじゃ伝える事はできねエ。 銀時は妙に慎重な所があつからなア まあそんなに心配しなくても直にアイツが明かすだろ? 今もそのことで動いてるしなア」

「…。遊びに行つた訳じゃなかつたんですね…。」

寝て いる間に 煙管を没収され苛立つて いるのか三味線を荒く弾きながらも律儀な高杉に新八も神楽も興味を持ったようだ

「オイ 高杉イ…お前の仲間 またことか口リ「ンはどうしたネ大将ふらついていいアルカ??」

「あア 僕の隊はそんなことじやあ崩れねエさ 大方、万事屋もそんなんもんだろオ?
…アイツと俺は正反対だが…紙一重つてやつだ。
それにこの劇 鬼兵隊にも役割があるんでねエ…しつかり働いてくれてるだろオよ…」

そういうつてクツクツと囁う高杉を見つめる2人は顔をあわせる

「…銀さんの幼なじみで一緒に攘夷活動をして いたんだよね…でも今は敵で、今回は休戦中…?なのかな。にしては銀さんの最近の事をよく知つて いるみたいだよね…まあ、細かい事は銀さんが帰

つてか、ひじよ。」

何故か心無しか晴れやかな顔で家事を始めつ新八を見送つた神楽も期を取り直したように高杉の方を向き、持ち物をあさり始める…

しばらく平穏な時が流れ、そして

チャイムが、鳴つたー

留守 獣と兎と眼鏡と…（後書き）

車酔いでもつづったんですねけど…こまいる上手く動かせないので弛んじやつてますね。

お読みいただきありがとうございました！

依頼 田中吉見の帰還（前書き）

銀ちゃん、誕生日おめでとうーーー。

ところで、前話は酷かったです……今は楽しんで創り過ぎました。
以後自重します。

依頼 田舎伝説の帰還

「たでーまー 銀さんが帰つてきたぞー」

ガラガラッと昨夜も壊れた玄関の引き戸を開けて家主が帰つてきた

そのまま居間に入つてきた銀時に窓いでいた3人がそれぞれ、訝しむような憎むような表情で見返す。

「…おいおい 3人揃つてなんつー顔してんの？ つーか仲良くなつたんだ。…じゃなくて なんか言つてくれない？？なんできつと無言なんだよ！…」

「ああ すみません銀さん。なんか意外な格好だつたんで 朝から何処に行つてたんですか？」

： 時刻は午前11時30分

朝から置き手紙と高杉だけを残して万事屋をでていた銀時は今

何故か白の戦装束に鉢巻き そして真剣を腰に帯びた出で立ちでいるのだ。

銀時が返答につまり頬をかいていると高杉が横槍を入れる

「ずいぶん久しぶりだなあ……白夜叉様ア……お使いはできただろーなア?…しかし、懐かしいねエ」

「つたく自分で用意しといてよく言つぜ。
まあ もともと真選組にはオメーのせいにバレてるから話つけてあるし……簡単だつたよ。」

久しぶりの戦装束に少々ぎこちないが、いつも通り長椅子に寝転び頭の下で手を組む様子はなんとも妙で、子供二人を戸惑わせる

「それって銀さんが戦争中に着ていた服ですね…… 餌つて……誰かをおびき出すつもりなんですか?」

「銀ちゃん本当に真っ白アルナ それに香水？みたいな匂いするヨ

…」

神楽の発言に若干取り乱した様子の銀時は冷や汗をかきつつ弁明する

「この服はレプリカねつ！ホラこいつボンボンだから… 記憶力で作つたらしいよ！！香水は…イヤ 本当に真面目にお仕事してきただけだから！！正確には…」

ここで一旦言葉を切り、立ち上がりて2人の元へゆき、高杉に向かつて軽く会釈をする。

「大物攘夷志士…高杉晋助様のご依頼を我等万事屋がお受けいたしました…

依頼内容は 京の反乱を引き延ばし、東の城を崩した上で
新しき空へ門扉と空飛ぶ黒幕を撃ち落とせと。協力して下さるの
は鬼兵隊の皆様と春雨の方々ですね。必ず達成できるよう、全力を
尽くさせていただきます」

「春雨が仲間ッ！？バカ兄貴は一体何する氣アルカ？」

いち早く反応した神楽に高杉が旧き姿の銀時を見ながら答える

「神威の野郎かア？ 銀時、テメー厄介なもんに惚れ込まれたなア
…お前と戦うための条件がこの依頼達成さ。…お前やんなア俺だ。
わかつてんだろーな？」

白い銀時は服を汚さないよういちじ牛乳をストローで吸いながら呆
れた顔をする。

「いや…オメーの獲物でもねーし 神楽の兄貴にやられるつもりも
ねーよ。神楽…オメーの兄貴の事はテメーらで片付けられるな…？」

「ふんつ 当然アル！！バカ兄貴を取り戻してみせるネ！」

控えめな胸を張る神楽の頭を撫で、糖分と書かれた掛け軸に向き直る銀時に2人も続く。

「万事屋 出動だアアアーー！」

依頼　田中伝説の帰還（後書き）

本当はサブタイトルは別にあるんですが、つていうそれだけです。

裏方 動かせるモノ（前書き）

本当に更新落ちます。

こっちの銀さんはあくまで格好良くなっていますので。
キャラ崩壊は（？）愛嬌つてことで…セリフは修正するかもですが（笑）

裏方 動かさるモノ

彼岸花が川岸を朱く染め上げ、本格的に冬が近づく江戸は、今、静かな長い秋雨に濡れていた。

そんな大江戸の中心に位置し、周りの景色からどこか逸脱した雰囲気を持つ異星の象徴。所謂ターミナルから程近い廃ビル街に位置する小さな路地裏。・

太陽の下を生きる人間ならば避けて近寄らないような薄暗い裏通りにも等しく、冷たい雨が落ちる早朝である。

そんな中、一人の編笠の男が軒下にたむろをする者を搔き分けるようにして走っていた

息は切れ、明らかに体力をもつてゐるであらう身体も悲鳴をあげて
いるだらうに更に雨に濡れ、必死といったような出で立ちである。

男はよひやく立ち止まつ、目的のビルへと入っていく…

「桂やーんつーー..」

勢いよく開けられた扉から聞こえた野太い大声に若干眉を顰めたのは、男が入ったビルの2階で何やら会議をしていたらしき着物の厳しい男達。

その中に立つてんまい棒を握り締めていた優男が突然の闖入者のもとへ走り寄り、何やら耳打ちすると、2人で部屋をでていく。

2人が入つていつた部屋はどうやら反対側の路地に面しているようで此処からは見えない

そこで真選組監察に所属し現在は監視任務について山崎退は望遠鏡を置き、牛乳のパックを開けつつ呟く

「つたく こんな微妙な任務やらされてミントンの大会に出られな
いなんて… 雨だから試合は中止だろーがつて だから鬼の副長なん
だよ。んなわけねーでしょ。しかも高杉一派の動向よりも桂の張
り込みか… アジトがわかつてゐるのに突入しないのは万事屋の旦那の
為だらうけどねえ…。つぐづぐ副長も… ジュー」

真選組の副長… 土方から、あんぱんではなくクリームパンを山のよ
うに渡された監察、山崎は牛乳をストローで啜りつつ再び望遠鏡を
手にした

数時間前

まだ東雲といった時刻。江戸を護る真選組も見回り隊が引き上げて
久しく、殆どの者が眠りに落ちた頃…

屯所には静かな侵入者の影があった。といつても堂々と門から入ろうとした所を徹夜明けの土方に見つかり呆気なく捕まってしまった訳だが……

「おいイイイ！…てめえはそんなに捕まりたいのかつ！なら俺が今叩つ斬つてやるわー！折角釈放してやつたのを無駄にする氣かお前は！…」

屯所に侵入というか進入しようとした銀時は今繩でぐるぐる巻きされて庭にいる。上から怒鳴る土方の声はいつもより控えめだ。

銀時は暗闇の中で薄く笑うと、あさりと繩を解いて立ち上がり、土方の首に腕を巻きつける……

「んな訳ねーじゃん、多串くんには聞いてもらいたい」とがって
きたんだよ…時間がねえんだ。中に入れてくんない？」

銀時の真剣な顔つきに何かを感じたらしい土方は、至極しぶしぶといつた体で歩きだす。縁側から直接入り、途中で山崎を呼び出し副長室へ銀時を案内する。

両者が床に座り、落ち着いた所で銀時が頭を搔き、面倒くさそうに口を開く

「んじゃまー一丁、交渉開始といへば、真選組よお・・・

裏方 動かせるモノ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ところで、頂いた感想には大抵 誤字脱字の修正を、とかいてある
ので直したつもりですが、もし未だ不備があればなにかコメント頂
けると嬉しいです…（作品でも作者ページでも何処でもです）

再臨　巻き込む者　巻き込まれる者（前書き）

どうでもいいんですが、坂田金時のインナーって白ですか？・金ですか？・作者がわからん描[写]をしてしまいました…（苦笑）

再臨　巻き込む者。巻き込まれる者。

・・・ってな訳で　桂の潜伏場所を流してもうう代わりに鬼兵隊への妨害を辞めさせられちまつたが…

明け方から降つていた雨は止み、江戸上空には重い暗雲が立ち込め
る…時刻は午前10時過ぎ

男は足音静かに歩きづづけていた。

旦那も無茶言いますねイ。場所だけバラして昼まで手エ出しちゃいけねーなんて・・まア　情報が正確だったってのは山崎から聞いて
るが…

そこで真選組一番隊隊長 沖田総悟は足を止め、つい先程 奇妙な格好をした銀時が閉じた万事屋の玄関を軽く見据える

「旦那ア、旦那は…俺ら真選組を一体何に巻き込むつもりなんですかイ…」

数時間後

「さやつほーつ…！ お寿司アルー」

「お寿司の出前ですか、銀さん ありがとうございます。 なにかあつたんですか？」

万事屋にしては随分と豪勢な昼食に反応する従業員2人に対するオーナーのテンションは高い

「おう、飲んで食いまくれエ！！ 今万事屋はかつてない金蔓を手にしてんだア！！ 新ハ 神楽ア なんでも頼んでいいぞオオオ！！ なア、高杉様ーーー？」

上機嫌にいちじ牛乳とお菓子の山に埋もれる銀時はゲラゲラ笑いながら懐を叩く：

昼前に帰ってきた時の服からは着替え、今は高杉の持参したもう一つの着物を着用している。

始めて会つた人からの印象はあまり変わらないだろう、普段と同じ和洋折衷の着物ではある……が。

色彩が全体に違うのだ。いつもとかわらぬ渦巻きの入つた着流しの色は黒。インナーの上下も黒ではない。更に頭には金髪のストレートウイッグを着けている……その容姿は正に

「おめえの写真見せたら着物屋が勝手に作りやがったんだ……坂本の奴はお前の事金時とか呼んでやがったなア……その通りじゃねえか」

高杉が食事を摂りながら何気なく呟くと、金時・基銀時が思い出したように田を見開き、接いでなんとも面倒そうな表情をつくる。

「そーいや 辰馬の野郎が近々地球に来るとか行つてたの忘れてたわ こっちで大きな祭があるとか言ってたよーな気がするが、ま

あーーや。」

そういうて更にケーキを頬張る銀時は、本当に坂本の事など忘れてしまったかのようだ。

と、その時。今まで見るともなくついていたテレビ番組がいきなり切り替わり、硝煙の立ち込めるいかにもな爆発現場の中継が映し出されていた。

どうやら空から墜ちてきた小型船が地面に落ちて爆発したといった様子である。突っ込んだのが只の空き地だったのは奇跡だと近所の住人が騒いでいる。

暫くすると煙の中から黒い影がふらふらといちらへ近づいて来る…

人影なのだらう、駆けつけた消防隊員が走りよつていぐ…長身だ…更に頭はもじや もじやと爆発を表している…そしてその手が握るものは…

〇〇歳

「た・・辰馬アアアー!?

なんともタイムリーで空氣を読まない登場の人物はテレビの中で喚いている

「わしゃ 銀時じやなくて、金時に会いに来たんじや

金髪に黒の着流しの出で立つである銀時は、倍増したともいえる巨介事に頭を抱えた…

再臨　巻き込む者　巻き込まれる者（後書き）

お読みいただき有難いります。再び戻つてきますので（笑）

疑惑 白煙は撫ぬない。（前書き）

お久しぶりです。
お気に入り登録など、ありがとうございます！

疑惑 白煙は掴めない。

「…」ちらり一番隊A班つ！！標的、見失いました！…」

「…」ちらりB班！！…一端の捕縛に成功！本部へ向かいます…！」

現在、真選組の情報部…延いては局内全体が大混乱を起こしていた。

数日前に銀時から齎された大物攘夷志士…桂小太郎の潜伏場所の件が長引いているのだ。

当日…突入時刻である午後12時までには真選組の総力を集結させていたといつても過言ではない。

いや、可能な限りの数が完璧な陣を組んでいたはずだったのだ。

しかし…桂の手勢が真選組の予想をはるか上回っていたのだ。

桂を確認したあのビルは単なる入口で、地下深くにある要塞のような場所が真の潜伏場所だったのだろう、後になつて調べた結果だ。

予想外の反撃に驚き、隊形を崩したのが不味かつた。更に、時を経るにつれ攘夷浪士の活動は激しくなっている。5日間連続で江戸全域を戦場とした隠れた攻防戦が繰り広げられているのである。

今でもあちこちの隊からの連絡が絶え間無く続き、通常業務は全て他の機関があたっている。

とはいっても、江戸の一般人はそのような事には全く気づいていない。
所謂平和な秋の一 日である。

・真選組は今、裏舞台を演じているのだ。

「チツ」

土方は苛々と煙草を噛み潰していた。真選組の情報を一手に集める部署の隅である。

もちろん彼は副長とはいえる最前線で戦うのが常だが、今回に限っては江戸のあちこちで同時に浪士達からの襲撃があるので。幾重にも別れた隊を統率するために本部で指令を出しているが、埒があかない。

「土方さん、どうやらこの班の方も陽動だつたみたいでさア……何故か、地方で活動している筈の浪士が多数捕縛されてるみたいですねイ。というか、奴ら増えてるように見えませんかイ？」

「明らかに増えてんだろーが……初日の5倍には膨れ上がってる。つか、てめーは何サボってやがんだ！」

「何言つてやがんですかイ土方コノヤロー。俺ア 負傷した隊員をここまで連れてきたんですぜイ 奴ら、まるで俺達に怪我させないよう命じられてるみてーで……そのまま逃げちまいやしてね。全員殆どかすり傷程度なんですよ……ひょっとしたらこりゃ、やつ

「ああ、俺達真選組がこの一件だけで手一杯になるために騒ぎが起きてるよつな……嫌な予感がすんだよ。……」
早くこい

銜えていた煙草を灰皿に押し付ける。思わず溜息が出そうになり、

顔を上げて灰色の天井を見つめる…

落ち着いてみると、この件の発端は5日前の明朝、あの万事屋を嘗む男、坂田銀時、いや…元攘夷志士で、白夜叉の異名を持つ彼が真選組に侵入してきた事だったのだ。

彼は俺たちに見つかっても、捕縛されても抵抗は無く、焦りも感じさせなかつた。つまり、桂の居場所を伝える為に此処にやってきたようなものなのだ。

そもそもその目的である鬼兵隊への接触を絶つよつた行為の真意もわかつていない。

只、今回はテロの為に来たわけではないから邪魔しないでくれ、保険としては自分の首を差し出すとだけ。あの銀時が言い切つたのだ。
…ほぼ間違いないと見ていい。

現在実際に、真選組は鬼兵隊の動きには関与していない…という
かできない状況にある。

恐らく銀時と桂は繋がつている…更には鬼兵隊の高杉もだ。幕府の元で毎日のように攘夷浪士と接觸していながら、真選組の持つ情報は思いの外浅いのかと思つと悔しくない訳がない。

土方は新しく入った無線に応答するため、足を踏み出した。

疑惑 白煙は掴めない。（後書き）

もうハロウィンですが、此方では10月上旬です（笑）

追憶　血のモノかぎりの懐かし（後編）

Trick or treat!! 読んでくれなきゃ
死つ！

追憶 白のモノから黒のモノへ

時は遡り、真選組の桂襲撃から翌日の万事屋。

「本当に良かったんですか？坂本さん、一泊だけで帰つてもうつちやつて……」

「あー？んじや聞くけどよお、万事屋ん中に大の大人が2人も増えた状態で何日も過ごすとしますよ。…つほら、むさ苦しーだろーが。だいたい、本来は俺一人で住んでた訳だからね。」

「はいはい。まあ、姉上の社員旅行で泊まらせてもうつてる以上何も言えませんけど……」

昨日の午後、警察まで回収に言った黒い方のもじや もじや の話である。彼は昨晩は財布を取られながらも結局は万事屋に泊まり、先ほど口が登つきらぬ内にと帰つていったのだ。

「おはよーアル 銀ちゃん、新ハイ、やたらと早いアルなー」

押入れの襖が開き、神楽が目を擦りながら、なんとも眠そうに出てくるが、きょろきょろと辺りを見回すと、首を傾げる。

「あれ？ タカスギとタツマは？ 星へ帰ったアル力？」

「おはよう神楽ちゃん。つーか一人共地球出身だからね。坂本さんはさつき帰っちゃったけど、高杉さんはちょっとした用。すぐに帰つてくるつてさ。」

「ふーん。つーかあの片目野郎いつまで万事屋に屈座るつもりアル力…。帰るとこ無くなつたネ？」

「まーそんなもんだる。んで、それが帰つてきたから出掛けたの。」

銀時は炊いたご飯をお櫃に移動させて居間に運んできた。反対に神樂は洗面所で顔を洗う。新八は定春のエサを準備した手を洗い、手

を拭きながら疑問符を浮かべる…

「なんか、信じられないですね。桂さんや高杉さん、坂本さんまで万事屋に集まってきたて、江戸の平穏さが不思議すぎませんか？」

「まあな、つづーか今回のはマジだから俺らも関わってる訳だし…江戸が平和に見えるのは上辺だけってことだよ、新ハくん」

そう言つて味噌汁を注いだ碗を新ハに手渡す。新ハはそれを受け取ると逆の手で箸を配る。

「やういえば高杉さんつて少食ですよね。ご飯の量を増やしたり減らしたりしないの？…」

「あー…アイツほんぼんだからなー。少食つづーか、高級なモノちびちび食つて酒呑んでんだよ。背^エ低いのが証拠だぜ。おめーらも氣イつけろや」

「あー三一 おかわりー！」

「はいはい。…神楽ちゃんは取り敢えず安心だね」

ひんぽん

銀時が瞬時に玄関に飛び蹴りを入れる。しかし、外から聞こえたのは老婆の怒鳴り声ではなく、若い男が潰れる音。

「桂さん、お茶です。朝ごはん要りますか?」

「ああ、すまんな。味噌汁だけ頂こう。

「なに賣いでんの？」

「違つわっ！こんな時に窓いでいる訳なかろう。昨日もみんなにつみてるの使い方を教えてもらつたりして大変だったんだぞ、感謝しちゃ銀時！」

「はあ？ 秘策があるってオメー…まさか t m i t t e r 使って攘夷志士共集めてんの！？ 確実にバレバレだろーが 警察なめすぎだろー」

「いや、俺のアカウントではなく、Hリザベスのアカウントを使っているから安心しろ。」

「安心できるかアアア！」

銀時がキック、次いで神楽が拳を桂の頭に振るう。新八は特に手は加えないが、明らかに呆れている。

「これはつ痛いぞリーダー！でもなあつそのおかげで今全国から続

々と攘夷志士が集まつてきてこるんだや。我らのフォロワーがこの国を覆ひ出すも遠くはないのだつ！」

「 もつこーです。それで、なんてやれたやいたんですか？ ヘツミシタ
一ドヤセヤレハツ つてよく聞きますし、いつものメール勧誘とは違
うんですよ？」

「 セウガ、新ハ君やリーダーには言つてなかつたが、昨日銀時に手
伝つてもらつて全国の攘夷志士に号令を出していたんだ。つみつた
一はその一貫とこつ訳だ。」

「ぎ 銀ちゃんが真つ白な服着てたのはその所為アルカ？…でもな
んでそんな事で人がいつぱい集まるネ？」

「銀さん…もしかしてアンタ本当に戦争の英雄だつたんじやないで

すか?「

銀時は無表情に立ち上がり、台所へ向かいつつ目を瞑り、呟く

「んな大層なモンじゃねーよ…」

ドンッ

「イテツ」

気配を感じなかつた為によけること無く銀時とぶつかったのは、高
杉だつた。

追憶　母のモノかきの頃（後編）

「ひでもいこんですが、ハロウイーン没話の頭、ダイジョスト。

「Trick or treat!! わたしをくれなきゃ……殺されやうやく」

「なにこいつやがんだ… テメーにやる菓子はね。帰れ。」

「わへ、相変わらず堅いなーお待わせ。
せっかく地球に行へんだから面白事は知つておかなければと思つて
ねー、
そしたら…お菓子を食べながら殺し合つ祭があるって聞こへね。
つい試してみたがったんだ」

「おこなは、確かそんな祭じやなかつた気がするぢゃ いのすりひい
どりこが、」

「フン、阿呆くせH……」

「まあ何でもいいけどね…取り敢えず鬪わないかい、高杉さん?」

「ゴメンナサイ。

招待 繖れた操り人形（前書き）

ちょっと繋ぎなので短くてすみません。

招待 糜れた操り人形

混乱していたのは真選組だけでは無かつた。

しかし百戦錬磨の英雄であるうと予想できなかつただろう事態が起きていたのもまた事実である。例えそれが真実で無かつたとしても。

「副長……江戸 全域で確認されています。全隊が目標見失いましたっ！！」

先ほどまで断続的に起きていた攘夷浪士との交戦が江戸 全域……真選組全隊、全班で途絶えたのだ。

幕開けとなつた桂襲撃の昏から丁度5日後の出来事であつた。この事態に、元より混乱していた真選組は、取り敢えずといった体で全隊員に撤退命令を出した。

完全に弄ばれたとしかいえない状況に憤る隊士達のもとにふらりと訪れたのは、またもや万事屋のオーナーその人であった。

応対した隊士に開口一番 副長さんに会わせてよ、と最も危険な任務をしれっと言い付けた銀時は、待たされていた客間に土方が入つてくるなり笑つた。

「てめーはふざけんのかつ！…こいつちがどんだけ忙しいと思つてやがる、そもそも今回の件はオメーのせいだ…つー」

この5日間、殆ど寝ていらない土方は後始末に追われる身でもあり、非常に機嫌が悪かった。そんな自分を呼び出しが銀時で、彼が笑っているとあればスイッチが入るのも頷ける。

とは言え、銀時については不審な点を感じていた事もあるので一まずは話を聞くことにした。

「5日前、俺は此処真選組に来んだ。元攘夷志士、白夜叉としてな

「は？」

「おめーらが桂を襲撃してからの事を元々わかつて、あえて奴の居場所を伝えたつづーことだ。」

「んな訳…」

「なあ、今幕府の実権が完全に將軍の元を離れてるのは知ってるよな？今の幕府を動かしてんのは天導衆つー天人のお偉いさんだ。奴等は俺ら地球人の事なんざなんとも思つちゃいねー。」

その玩具になつてる幕府は宇宙最大の海賊集団…春雨と繫がつてやがる。」

「万事屋てめー何言つてやがんだ。…なんでテメーがんな事知つてやがる。善良な一般市民、なんだろーが」

「春雨と幕府の密約の為に暗躍した鬼兵隊…高杉と親交を保つてる元攘夷志士だ。もと、なモト！ この五日間テメーが碌に眠れなかつたのは俺の後輩達さ…　近々戦争が起きる。幕府を倒すんじゃねー。俺たち地球人を道端に転がる石程にも思つちゃいねー奴等を葬るんだ。」

「やっぱり地球はいいね。お侍さんがいつぱいこむよ……やっぱつ今すぐ闘いたいな。」

「何言つてやがる。神威よおめーが此処に来たのは手心えのない奴等殺す為なんかじやねーだらつ。折角の邪魔な瘤を取り去る機会だらう。」

「まー別にいいけどね。シンスケは地球をビリするつもりなんだい？」

「俺はただ、この腐つた世界が許せねえだけだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9721w/>

鬼が噛った紅い空

2011年11月6日11時04分発行